今月のテーマ：暑い夏の日に思うこと

2023年8月　Vol.31 No.8

環境と文明

認定NPO法人 環境文明21会報

風

「未来を語る」ということ

杉浦　淳吉

「未来世代の権利」について考える機会が2023年7月の土曜日に東京都内であり、参加者の皆さんのお話を伺いながら、私自身も色々と考えることができました。当会主催のこの集いについて別途報告があると思いますが、記憶が新しいうちに、思いついたことを挙げておきたいと思います。

将来世代の権利といっても、私自身は漠然としたイメージしか持っておらず、そこで何が議論されるのかも分かっていませんでした。そもそも「未来（将来）世代」とは何を指すのでしょうか。その一つの考え方として、まだ法的に政治に参加していない人たち、つまり18歳になる前の人たちが挙げられるようです。年配の人たちよりも若者たちの方が未来の世界を過ごす年数も長いと考えれば､それも納得のいく答えです。そこには、これまでの人々の行動の集積によって生じてきている気候変動によって、現在の私たちが享受してきた環境を、次の世代に引き継いでいってもらうことができるのだろうか、という疑念があるのだと理解できます。

地球温暖化の時間的経緯からすれば、将来とか未来とかいった時に、せめて50年後とか100年後くらいのことを考えるのではないかと思っていた私は、現在すでに生存している子どもたちですら、その権利について考えなくてはならないような状況であることを思い知らされ、少なからずショックを受けました。今の社会はこれから生まれてくる人たちのことが考えられていないということが問われているのです。「将来」が長いのは若者で、その世代が自分たちの権利を主張するのは当然のことでしょう。

自分たちの利益に関わることなのに「若者は政治の話をしない」といったことが言われています。このことを日本社会に限定して議論するとして、政治の話をしないのは若者だけでしょうか。私は環境リスクへの対処行動の普及について社会心理学の立場から教育・研究を行っていますが、最近行った国際比較調査でも、日本の人々は欧米の国よりも、また近隣のアジアの国よりも、身近な人々と環境について語る頻度が低くなっていました。

この結果を様々な観点から分析すると、その原因の一つは次のように考えられます。すなわち、自分自身は環境に関心をもっていても、「他の人々は環境について関心をもっていないだろう」と推測し、そうした話題を期待されていないと敢えて話さず、皆が同様に考えているために、結局お互いに環境の話をしない、ということにつながります。これを社会心理学では「多元的（集合的）無知」といいます。環境を政治に置き換えても同様のことがいえると考えられます。他にも世論の形成に関して、ある意見が優勢である場合に発言がしやすく多数派を形成するのに対して、少数派は意見が言いにくくなるという「沈黙の螺旋理論」でも説明ができます。

未来世代の話に戻すと、「未来の人たち」も一様ではなく、それはどのような他者なのかを考えなくてはなりません。私たちの社会は、自分が属している集団（内集団）と所属していない集団（外集団）とに分けて考えることができます。自分の家族や自分の住んでいる国は内集団と捉えられます。常識的に考えても理解できることですが、内集団のメンバーに対しては、外集団のメンバーよりも、相互に利益をもたらそうとする働きがあります。誰ともわからない人の未来のために行動しなくても、自分の子どもや孫のためだったら行動できるということがあるでしょう。同様のことが、国際間や世代間、考え方の異なる人々の間でも起きてきます。言うまでもなく、この世界では様々なところで利害による集団間の対立が生じており、「私たち」と「あの人たち」とで分断される状況があります。

こうした集団間の葛藤を解決するために社会心理学的な観点から考えられる方策の一つとして、共通の目標を具体的に見出し、コミュニケーションの機会を設けながら目標を達成するということが挙げられます。あたり前のようなことと思われるかもしれませんが、まさにそれが出来ていないということなのですね。

共通目標を達成するために何をしたらよいのでしょうか。私がとっているアプローチの一つは大学の講義におけるゲーミング・シミュレーションの実践です。現実世界のモデルを教室に再現し、ルールを設定した上でゴールを目指し、学生はゲーム上で設定された役割を演じます。環境政策ゲーム「キープクール」の活用はその一つです。ゲームの世界では現実の制約から解放され、「こんな世界もありうる」ということを語り合います。ゲーミングは「未来を語る言語」(Duke, 1974) と言われる所以です。ゲームの設定によって未来の人々の利益（権利）を考えることも必要となりますが、そこにはプレーヤーが演じる役割との利害関係が生じ、それを乗り越えていかなくてはなりません。果たして未来世代と現在世代ではいかなる共通利益を設定できるのでしょうか。

環境文明21は具体的な政策提言を行うNPOですから、上述のようなゲームの世界の話は荒唐無稽に映るかもしれません。しかしながら、現実に縛られたままでは新たなアイディアの創出の制約になることもあります。つい先日も、講義での実践を少しでも紹介できればと、代表の藤村コノヱさんに私が担当する講義「環境行動論」に参加いただき、「将来世代の権利」の話も絡めながら、大学生との対話の場を設定しました。今回特に感じたことは、大学の講義に本会のようなNPO活動を絡めることは、学生にとってさらに有益な学びの場に発展させられるということです。

1年前の本欄でも触れましたが、私にできることは本会にかかわる皆さんと、これからの社会を担う人たちとをどう繋げていくか、ということであると、気持ちを新たにした次第です。

ながれ

バックキャスティング再考

大西　悟（おおにし　さとし／国立環境研究所・福島地域協働研究拠点）

カーボンニュートラルが多くの組織の目標となり、バックキャスティングに基づいた計画を目にすることが増えました。言葉や手法が一般的になるにつれ、根っこの考えが抜け落ちることはよくあります。当の私も福島県の自治体でゼロカーボンビジョンづくりやそれに基づく研究支援をしていますが、つい忘れがちになることを自戒し、暑い夏に筆をとります。

●描くべきは「理想」　WhatからWhyへ

「理想」と「現実」のギャップを埋めるのがバックキャスティングです。カーボンニュートラルの「理想」は、「温室効果ガスの排出量が実質ゼロになっている」状態。加えてwell-beingを高めることも大切です。

しかし、このところ削減目標が「ノルマ」のようにふるまう姿も見受けられます。自治体や企業のある部署に削減目標が課され、施策メニューが並んでいる状況（What:何をやるか？）です。それがお尻に火をつけるのも確かで、第一歩ともいえます。とはいえ、担当者は、そもそも計画づくりに参画していないことも多く、やらされている感もあるでしょう。

そのときに「そもそも何のためにやるのか？」「この町・企業、この部署、そして私にどんな良いことがあるのか？」という問い（Why：なんでやるのか？）が改めて出てくることは健全なことだと思います。その際に専門家として、「現実」に耳を傾け「理想」を見出していく態度は持ち続けたいなと思います。

●「人」のキャスティング　WhatからWhoへ

「理想」を前に、あるいは危機を前にしてすら「そうはいってもさぁ」と現状維持バイアスが働くのが人の特性です。それに対し、魅力的な「理想」とそれを実現する道筋の二つがセットで提示されると行動を変えるきっかけになります。

それがビジョンを描く人の仕事です。「現実」に足りないところを明らかにし、補うために人を育て、キーパーソンとつながり、必要な資金や資材を集めて現状維持と異なる新しい動きをしていく必要があります。このプロセスは、温室効果ガス排出と関係のない文脈・コンテクストで生じるものですが、とても大切な視点です。

そこから、登場人物のキャスティング（Who:誰が、誰とやるのか？）の重要性が見えてきます。誰がどんな動きをするとよいのか、その人たちの活躍を促す環境や場所は何か？などの解像度を高めることが大切です。国、企業、地域、個人の資本は限られています。その中でスーパーマンに期待したり、担当者に責任を押し付けるのではなく、適切に資本を投入し、組織のあり方の再考も含め見直す必要がありそうです。

●実現にむけたプロセス　WhatからHowへ？

「理想」を達成するなら、どんな手段をとってもよいか？そんなはずはないはずです。まず、倫理的・道徳的であることが求められます。では、最も効率の良いパスの直線に乗ればよいか？それも違う気がします。人間は全くもって合理的でありません。だから、たくさんの試行錯誤があるでしょうし、それを積極的に促すことが大切です。

カーボンニュートラルは、科学的、政治的、技術的なフェーズを越えつつあります。今後、ますます統合的、創造的、挑戦的な動きが求められるでしょう。そして、そのプロセスで文化や芸術がうまれ、2050年以降を動かす力となることを期待しています。そう思い浮かべ、また「現実」と立ち向かうこととしましょう。

ながれ

夏めく街の崖線（がいせん）

岡田　精一郎（おかだ　せいいちろう／特定非営利活動法人マングローバル 代表理事）

崖線とは崖が連なる地形の事で普段は聞き慣れない言葉である。子供の頃に多摩川の畔が遊び場だった世田谷出身の私にとって、水と緑に次いで崖は馴染み深い存在。そんな懐かしさから、多摩川と密接な関係性を持つ「国分寺崖線」の景趣を書き起こしてみた。

東京都立川市を起点に国立市、国分寺市、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を越えて世田谷区、大田区まで全長約 30km を東西方向に横切る国分寺崖線は、古代の多摩川が南に流れを変えていく過程で武蔵野台地を削ってできた河岸段丘であり、別名「ハケ」とも呼ばれる。崖が形成されるまで約 10 万年以上の時を要したと考えられており、麓から頂上まで高低差が 10m ～ 30m あり天候や地域によって富士山や丹沢も眺望できる。崖上には緑豊かな雑木林の中にゲンジボタル、カブトムシ、タヌキ等の希少生物も棲みつく。一方、崖下では台地に降り注いだ雨水が地下に浸透して傾斜面や窪みから湧き水が流れてくる場所も数多く見られる。今回は、世田谷区成城から大田区下丸子まで全長約 10㎞ある崖線区間を歩いた昔の散策記憶をお話ししていきたい。

●崖と調和する住宅地〈成城・岡本・瀬田へ〉

小田急線成城学園前駅から徒歩 10 分にある喜多見不動堂を出発地点とした。成城地区は国分寺崖線の環境保全・水資源保護・景観に配慮した街づくりが行われ、成城憲章というルールが制定されている。崖線の緑地帯ではアカマツやモミジ等の落葉樹林が生い茂り、みどりの生命線としてグリーンベルト機能も併せ持つ。成城を後にして岡本地区へと足を運ぶと、崖線地形の環境を好んだ歴史的人物の別荘跡地が保存されている。三菱財閥の岩崎家別邸・庭園（静嘉堂文庫美術館）や旧小坂家住宅が挙げられ、今でも二子玉川の奥座敷としての名を誇り、宅地開発から免れた崖斜面には竹藪など手つかずの自然が残る。

●都内唯一の渓谷〈野毛から等々力へ〉

東急大井町線の上野毛駅は、国分寺崖線を切り通して建設したため半地下構造だ。崖を意味するノゲの地名だけあって、下車すると地形が即理解できる。隣町では谷沢川が崖線に切れ込み、浸食により形成された都内唯一の等々力渓谷がある。湿性植物や古代の地層も出現し、気温が地上と比べて２℃程度低く水のせせらぎに涼を感じる避暑地である。

●古墳で歴史を読み解く〈田園調布へ〉

田園調布地区の崖線には6世紀前半～7世紀中頃に築造された多摩川台古墳群が連なり、古代人が自然資源に恵まれた崖線沿いで巧みに生活してきた痕跡が伺える。そして崖線は大田区下丸子駅付近の光明寺で終わるのだが執筆中に地形図を開いてみると、環境文明21の事務所は国分寺崖線上にほぼ位置する事にふと気づかされた地形散策の夏であった。

ながれ

入念な準備のその先に…

山田　恵（やまだ　めぐみ／元インターン生、東京都在住）

昨年に続き、今年もお声がけ頂いた際、あっという間に一年が過ぎたという育児中の我が身の感覚と、子供の成長の様子から、しっかり時を刻んできたんだなぁ…という感覚の両方を持ち合わせていることに気づきました。

5月中旬に、息子を6泊7日のサマースクールに参加させる事を決意。親元を離れての宿泊経験も無い年中児（4歳）の息子を6泊という、年齢を考えると長いと思われる宿泊イベントに参加させることに心配と不安でいっぱい。しかし、それ以上に、確実に成長し一回りも二回りも心身ともに大きくなって帰ってくると信じ、子離れの良い機会とも捉え、決断。初めての人や物事に対して慎重になる息子に、サマースクールへの参加をどう伝え、どう準備していくかは夫婦にとっての一大課題となり、何度も相談し、入念に準備しました。

まずは、本人に伝えるタイミングや方法を検討。次に、去年の様子をカラープリントして壁に貼りつけ、いざ伝達の時を迎えました。息子の第一声、「パパもママも行くの？」と、私の中で、（やっぱりそれ聴きたいよね…）、想定通りの反応で、息子らしい、一番気になり、一番不安に思ったことだったのでしょう。親は留守番と説明すると、理解したようで、壁に貼られた去年の様子を色々シミュレーションするかのように、食い入るように見ていました。

その後、毎日少しずつ持ち物を一緒に準備。ついつい手をかけてしまいがちですが、「子供には不親切くらいが丁度良い」を胸に、洋服、パジャマ、バスタオル、水着、下着など、どれを持参するか全て息子に選ばせました。日頃から重視している「自分で選ぶ」は、選択したものに対する気持ちの強さやモチベーション維持への効果があります。例えば、自分で決めた遊びへの集中度や終了時間になった時の気持ちの切り替えの早さは目を見張るものがあります。

丁寧に準備の日々を重ねてきたことが功を奏し、今では、すっかりサマースクールへの期待が膨らんできたようで、幼稚園の友達が参加しないことに対して、「何で行かないのかね？」という程に（笑）。

準備の重要性は、15年以上のキャリアを通じて、仕事でも痛感。後輩指導でも、「伝える」ではなく、「伝わる」ように創意工夫し、準備して接することで、加速度的に成長します。環境問題への対応も、現世代が将来世代の為の準備だと一人ひとりが意識出来れば、入念に準備するようになるでしょう。そして、その対応は一朝一夕のものではない事を心に刻む必要も…。環境対応は、準備すること自体がゴールではなく、持続可能な活動を実践する為のスタート地点に立つことに過ぎません。今からでは遅いのでは…ではなく、自分事と捉えてスタートを切ることが重要です。

息子にとって、今回のサマースクールは、これからの成長に向けたスタートです。この会報がお手元に届く頃には、息子はサマースクールから戻って来ています。どのような変化が見られたかについて、またご報告の機会があれば幸いです。

サマースクールの荷物を詰め込んだリュックサック
（この荷物以上に沢山の思い出を作ってくることを願いながら…）

ながれ

コロナ禍その後

竹内　翔（たけうち　しょう／元インターン生、会社員、福岡県糸島市在住）

今年になって、コロナ禍の制約もほぼ無くなり、長女が小学校に入学したり、私の身のまわりでもいくつか変化がありました。

１つ目かつ一番大きいのは、妻も仕事を再開した中、原則仕事をリモートで続けられること。リモートワークが容易でない業種・職種もあると思いますが、幸いなことに私の仕事は可能で、会社もそうした先進的な取組を積極的に取り入れる体制でした。これによって、子供の学校や幼稚園の行事に気軽に参加したり、子供が病気になった時など、ふとした時に子供の面倒を家で見たりできます。共働き世帯にとっては非常に大きなメリットであり、このような環境にいられることに感謝しています。一方、社会には、コロナ禍による社会的な制約が無くなったら、原則出勤しての業務に戻ったという例も多いと聞いていますので、ぜひ「リモートワークでできることはリモートワークで」が推進されると良いと思います。リモートワークは、従業員と会社との信頼関係に成り立っており、管理職の立場では難しい課題もあると思いますが、そこをなんとかぜひ。

蛇足ですが、これに関連して、地方暮らしがもっと広がってほしいと思います。私も地方に住んでいる身として、そのメリット、特に子育て世代にとってのメリットは数知れません。海・山・川・畑など自然の遊び場が身近にある、美味しく新鮮なものが安価に手に入る、など。

２つ目は、様々な行事やイベントが解禁になったこと。コロナ禍を経て、少し形が変わったものもありますが、人と人とが交流できる行事やイベントが私は好きで、大事だと思っています。子供たちの学校生活も、リアルでのやり取りがあるから学ぶことも多いので、元に戻って良かったと思います。

３つ目は、海外も含めた行き来が再開されたこと。他人のフィルターではなく、自分の目・耳・頭を通じて、外の世界の空気に触れることには意味があると思います。先日仕事でドイツに行く機会を得て、私の業界（脱炭素）において世界でどのような議論がされているか垣間見ることができました。私が感じたのは、現時点では日本が圧倒的に遅れているわけではないこと、但し言語の問題もあり、日本と世界で情報分断されているため置いていかれかねないこと。この分野は、日本だけを見ていても解決されないため、良いものは輸入する、日本の方が良いと思ったものは輸出する、といった積極的な姿勢が大事だと考えています。

日本社会を考える上でも、高齢化社会で労働力不足の中で、海外との人材交流・技術交流は必要不可欠だと思います。世界では、若い世代が元気で、そうした風も取り入れたいと思っています。

最後に、世界を見ると、ウクライナのこと、台湾の今後など、心が重くなることが多々ありますが、まずは、自分にできること、すなわち、自分の業界、住んでいる地域、そして自身及び身の回りの子供の教育に関することなど、できることからやっていきたいと思います。

ながれ

暑い夏に思うこと
～人生のターニングポイントと環境～

岸波　秀美（きしなみ　ひでみ／大学院生、元インターン生、東京都在住）

暑い夏。私にとって夏は、決意を定めて行動に移し始める季節である。

受験、留学の準備、就職活動など、人生の岐路に立たされ決断し、行動に移し始めるのはいつも夏だった。今回は、「環境分野に関わり続ける生き方をしたい」と思った私のこれまでの出来事や行動について綴らせて頂く。

私が環境に携わる仕事をしたいという意識を持ち始めたのは、中学校を卒業する頃からだ。

国語の文章読解問題で読んだ、人間活動による環境破壊の現状を知ったこと、また、歴史の授業で学んだ、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」に感銘を受けたことをきっかけに、「自然を守る人になりたい」と将来の夢についての作文に綴った。当時の私は、「人間は自然と共生していくべきだ。物質的豊かさを追求して環境を破壊し続ける日本には居たくない。精神的豊かさを大切にしている途上国の方が幸せではないか。」といった考えを持っていた。

高校へ入学すると、途上国の中でもアフリカに行きたいという意識が高まり、アフリカ諸国での環境保全・食と農に関わる仕事をしたいと考えるようになった。当初は農学部の大学を目指していたものの叶わず、最終的にはアフリカ諸国と交換留学制度を持つ、某大学に入学した。

大学入学後は、アフリカに行くことを夢に見て、英語・フランス語・スワヒリ語の学習に努めた。２年生からは開発経済・環境経済学のゼミに所属し、SDGsの普及に向けて、国民、企業、政府はどのような行動を起こしていくべきか議論してきた。３年生の時には念願だった交換留学を叶え、５か月間セネガルに滞在した。セネガルはアフリカの中でも経済成長中の国であり、生活のいたるところで、日本の昭和時代を思い起こさせるような風景を目にした。しかし、その風景は良くも悪くもだった。良い点としては、家族やご近所づきあいを大切にしていて、子供たちがたくさんいて、若者たちも勤勉。全体としてハングリー精神を国民から感じられた。悪い点としては、環境汚染という概念が抜け落ちた世界観である。具体的には、道端でごみを燃やす人、真っ黒な排気ガスをあげながら走る車、プラスチックゴミのポイ捨て、ごみで溢れる川、洗剤の混じった水の垂れ流しなどである。これまで大学内の議論で、「途上国であっても、環境と経済を両立していくべきだ」と軽々しく口にしていた私にとって、これらの風景は煉瓦で頭を打たれたようなひどい衝撃だった。この経験を通し、「現場で活躍できる知識をつけたい。自分の行動がちっぽけなものでも何か環境問題に携わる人生でありたい。」と考え方が変わった。帰国後は環境関連のあらゆる授業を取り、その中で、人間の活動や開発事業による環境影響を分析できるようになりたいと思うようになった。そして、環境を科学的に解析するため、高校時代に志していた理系の大学院進学を決意した。大学院進学決意後、ゼミ以外の環境に携わる活動をしていなかった自分を見つめなおし、インターン生として環境文明21の活動に参加させて頂いた。

そして、来年度からの某企業のカーボンニュートラル推進部への就職を控え、今年の夏は修士論文執筆に勤しむ決意である。

ながれ

祇園祭とクーラー

遠藤　瑞季（えんどう　みずき／2023年度インターン生）

現在、CSOラーニング制度のインターン生としてお世話になっております、遠藤瑞季と申します。東京大学大学院公共政策学教育部に所属しており、大学院では、経済と政治の面から再生可能エネルギーについて学んでいます。環境文明21の活動に興味を持った理由は、脱炭素社会の実現といった目標に対して、これまでは、経済や政治といった社会の仕組みをどのように構築していくかという点に着目してきました。しかし、環境文明21の設立理念である「人々の価値観を変える」という文言を目にし、真の意味での環境問題の解決には、価値観といった根源的課題にアプローチすることも大切だと感じたからです。大学院進学を機に今年の4月から上京し、研究と就職活動、そしてインターンと日々忙しく充実した生活を送っています。今回は祇園祭とクーラーについて書こうと思います。

私の出身は京都府木津川市です。先日、帰省した際に大学時代の先輩と祇園祭前祭（さきまつり）山鉾巡行（やまぼこじゅんこう）に行ってまいりました。山鉾巡行は祇園祭のハイライトとも言われており、長刀鉾を先頭に23基の山鉾が都大路を巡行します。山鉾が街中を巡行することで厄を集めるとされているので、集めた厄を留めないよう巡行が終わると山鉾は直ぐに解体されるそうです。京都に20年以上住んでいましたが、これまで一度も祇園祭に行ったことがありませんでした。しかし今回は、山鉾巡行の連綿と続いてきた歴史を迫力と共に実際に目にしたことで、伝統文化の偉大さと良さ、そして後世に伝える大切さを実感しました。写真は、その日はとても暑かったので鴨川で川遊びをしてきた時の様子です。

一方、今、この文章をクーラーの効いた自室で書いています。扇風機も買ったのですが、どうしても耐え切れずクーラーに頼る日々が続いています。電力需要がひっ迫していること、省エネを行うべきことは分かっていても暑さに人間は無力だということをひしひしと感じています。便利な暮らしを維持しつつ環境問題の解決に取り組むためにはどうすればいいのかと考える日々です。

インターンシップが始まって2か月が経ちました。毎回、「なぜ現行の政策が不十分／不適当か」、「中小企業が脱炭素に取り組むうえで何が障壁か」、「環境問題の解決は誰のためなのか」といったこれまで自分が持っていなかった視点や考え方を知ることができ、楽しみながら沢山のことを学んでいます。このような学びをより多くの人に得てもらいたく、現在行っているセミナーや意見交換会への若者の参加を促進するためにはどのような取組が効果的かを検討している最中です。今後の活動も励んで参りますので、どうぞよろしくお願いします。

経営者「環境力」クラブ 2023 年勉強会

7 月 11 日（火）開催の経営者「環境力」クラブ勉強会の内容をご紹介します。　（事務局）

「SLOW IS BEAUTIFUL ～自分の仕事を パラダイムシフト～」

青山 裕史 氏（油藤商事株式会社 代表取締役）

2011 年の東日本大震災の際、現場で不足していた燃料供給の要請を受け、ガソリンや軽油・灯油を現地に運んだことが現在の活動の原点にある。震災の翌日には、千葉の青年会議所の仲間からの依頼を受けて軽油 14 kℓと重油 6kℓを提供した。日本生活協同組合（co-op）連合会も全国に支援要請を出し、当社も付き合いのあった co-op 滋賀からの依頼を受け、3 月 17 日に当社のタンクローリーで大雪の中、滋賀から仙台まで軽油 4kℓを運んだ。仙台では全国から集まった支援物資を避難所に運ぶトラックの燃料が不足しており、co-op みやぎを拠点に給油を行なった。仙台からの帰路、今度は群馬県高崎からの依頼を受け、とんぼ返りで 3 月 19 日に高崎に燃料を運び、更に 3 月 28 日から 3 月 31 日かけて再び仙台へガソリンを運び、深刻なガソリン不足が発生していた現地の方々に大変喜んで頂いた。

この協力活動の経験や、震災被害や原発事故の状況、その後の復興の遅れなどをつぶさに見たことから、自分でもボランティア活動をしなければという意識を持つようになり、以後、琵琶湖の清掃活動をはじめ、全国各地の災害ボランティア活動を、学生にも声がけして積極的に行っている。常総市、彦根市などでのボランティア活動のほか、2016 年の熊本大地震の際には、これまでの経験から燃料不足を予測し、発生二日後には迅速に燃料の提供を行うことができた。九州北部豪雨災害、西日本豪雨災害、台風 19 号による千曲川氾濫の際にも災害ボランティアとして現地に入り、今年は和歌山県かつらぎ町の水害現場でもボランティア活動を行った。

ボランティア活動の現場では時として参加者のやる気「スイッチ」が入る場面があり、そうした経験を通して成長した学生や若者を数多く見てきた。ボランティア仲間の間では「できる人が、できる時に、できる事をする」が合言葉で、誰でも各々の立場でできることがあり、私もガソリンスタンド経営者としてできることを実践したいと考えている。

2030 年までの SDGs 達成目標に中小企業が取り組む際、17 個の目標のどれに合致するかという視点で考えがちだが、17 目標全体をかみ砕いて SDGs の本質を考えてみると、中小企業にとっての SDGs とは、①中小企業にしかできないイノベーションを起こす、②地場の経済への貢献、③地場の人材育成の三点に集約されるだろう。明治 28 年創業の油藤商事は地域に根差した ENEOS ガソリンスタンドだが、①～③を実践し、ガソリンスタンドの＜スロービジネス化＞を念頭に、バイオディーゼル燃料製造など独特の取組を行っており、地域の小・中学校だけでなく全国の様々な団体から多くの見学依頼がある。スロービジネスとは、お金や効率、スピードを追い求める「ファースト」なビジネスとは違ったもう一つの仕事のあり方だ。「独り占め」ではなく「分かち合い」、環境を「破壊」せずに自然と「調和」し、「モノの豊かさ」よりも簡素でも愉しい「心の豊かさ」を重んじ、人と自然と生き物すべての「いのち」を大切にし、自分らしい「生き方」と「働き方」が重なる仕事の仕方をすることだ。そのためには、誰も困らない仕組み（近江商人の三方よしの

理念）を近くでまわす（地域循環型社会・持続可能な社会）ことが基本になる。スロービジネスの実践でサービスステーション（SS：ガソリンスタンド）の潜在力は非常に大きい。SSは災害に強い構造で（空間力＝スペース）、アクセスしやすく（立地力＝ロケーション）、全国各地に40,000カ所もある（点在力＝ネットワーク）。これらSSを資源ごみ回収、地域貢献の拠点、障がい者雇用の場などに活用できれば、ガソリンスタンドのネットワークは社会的に大きな影響力を持てるだろう。私も実践者として社会に役立つ様々なチャレンジをし、積極的に情報発信し、事業を成功させることで他のガソリンスタンド経営者にも取組が広がることを期待している。

ITやスマートフォンの普及など社会の急速な変化に伴い、職業も大きく変化し、2011年に小学校入学の子供の65%は、2027年の大学卒業時に今存在していない職業に就くだろうという予測があるほどだ。ガソリン車がなくなればガソリンスタンドの仕事も変わらざるを得ず、今後、自分の仕事をパラダイムシフトしていく必要があるだろう。

油藤商事が25年前から取り組んでいるバイオディーゼル燃料リサイクルは、地域でのエネルギー循環を促すもの。この燃料は植物性の廃油からつくる軽油の代替燃料で、家庭や学校、職場などから廃食油を集め、ガソリンスタンドの精製工場で製造し、配送トラックや工事現場の重機などに使われ、地域でのエネルギー循環を支えている。この燃料の製造はSDGsの目標7（エネルギーをみんなにそしてクリーンに）と目標13（気候変動に具体的な対策を）に対応し、CO_2排出量を実質ゼロとカウントできるカーボンニュートラルな製品だ。この取組では人間を循環の一部と捉えており、モノを作ってから環境保全を考えるのではなく、「気持ちよく便利に生きるために役立つものをつくる」と「地球環境を良くすること」の両立を実現することが重要で、バイオディーゼル燃料製造もその一つだと言えよう。

＜主な意見交換＞

Q: バイオディーゼル燃料製造過程で発生するCO_2について、LCAでの削減効果を数値で示すと説得力があるのではないか。

A:LCAの観点など、様々な意見はあると思うが、自分達のエネルギーを自分達で集めているという物語があり、自分事として取り組むことでマイナス部分を補うと考えている。

○自分事にすること、共感（empathy）があれば環境活動も腹落ちするところがある。西武信用金庫では、新入社員に林業体験を行うことで、自分事として認識が高まった。

○ストーリーがある活動であり、我々の意識に訴えかけるところがあると感じた。経営者は目前のニーズに対応することが求められているが、未来のニーズを視野に入れた現在の価値観の大変革が必要であり、今、価値意識の転換点に掛かっていると暗示されている気がした。

Q: 最近のバイオディーゼル事情は？

A: バイオエネルギーはローカルなものだが、菅政権が示した削減目標の影響か、大手商社、ゼネコンなどから問い合わせや見学申し込みが相次ぎ、潮目が変った感がある。グローバルに展開することは難しいと考えており、そのように説明している。

Q: 油藤商事の成功要因は？

A: ボランティア活動が事業に結びつくことを実感している。ボランティアに行った直後に仕事が舞い込んでくる経験を何度もしており、人のために働くことで生まれたつながりや信頼が関係するのかもしれない。

（文責：事務局）

環境文明社会づくりあれこれ(24)

源流（24）

加藤　三郎

OECDのジャパン・レビューとその中から出てきた「アメニティ問題」への論考が長くなり、環境文明社会に辿りつくのが遅くなるのが気がかりだが、現在の私の価値観にもつながっているので、もう一つだけ紹介したい。

それは1980年1月号の『土木学会誌』に「豊かな都市環境を求めて－都市アメニティ考」と題して寄稿したもの（当時私は学会員）。43年も前の論考だが、執筆の動機は、東京はもとより帰国後に訪れた日本の主要都市の環境の貧弱さに衝撃を受け、さらにOECDから指摘された諸課題に対する考察と提言を述べてみたいとの思いから、かなり長文の論文を寄稿した。限られた紙面ではとうてい全体像は示し得ないので、いくつかのポイントのみ紹介するに留めたい。

それは、当時の日本の都市が、長い歴史や文化的伝統を保持する証である風格、落ち着き、うるおいといったものを欠き、経済的欲望やエゴがむき出しの都市の姿であるとの印象を率直に語って、次のように続けている。

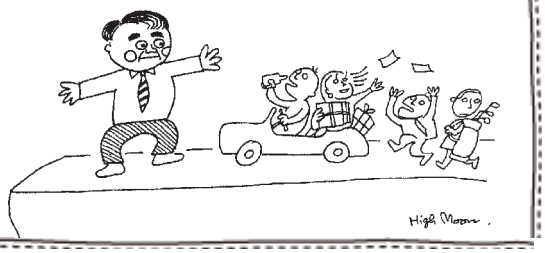
「しかもこの印象は、過去数世紀にわたって世界の富と権力を手中に収め、長い歴史を誇るヨーロッパ諸都市との比較においてのみ得たものではなかった。帰国してから早い時期に訪れた、四国讃岐の琴平山（金毘羅宮）の雄大で美しい境内を見た時、あるいは洗練された栗林公園を散策した時、さらにその後、鎌倉の古寺や身延山久遠寺の堂塔伽藍を見た時にも、帰国時に抱いた先ほどの印象を再確認するとともに、昔の日本人―昔といえば国の経済も個人の資力も今日とは比較にならぬほど小さかったであろうに―その人たちが築いたものの品位や美しさや雄大さと、現在の多くの都市にみられる猥雑さや安普請ぶりが鋭く対比されて、悲しみに似た気持ちを味わったことを思い出す。」

このあと論文では、OECDからの指摘、東京に駐在していたEC（現EU）官僚による日本の住宅事情についての「ウサギ小屋」論、ル・モンド紙記者ロベール・ギラン氏の日本都市批判、また政府の『環境白書』が初めて取り上げたアメニティ問題への行政からの対応分野案などを紹介しながら、私は次のように締めくくっている。

「日本の都市の多くは戦後三十年の間に今見る姿になった。これをもっと美しく、ゆとりもあり、しかも、日本では避けることのできない災害にも耐える都市に改造する意志さえあれば、あと三十年もすればすばらしい魅力も風格もある都市をもつことができるであろう。」

幸い、ここに記したとおり、日本の多くの都市の姿は、当時から大きく改善し、加えて伝統文化を今なお色濃く留める田園集落を含め、多くの外国人観光客にも愛され、評価されるようになったことは嬉しい限りである。

93年に退官後、藤村コノヱさんや荒田鉄二さんらと直ちに立ち上げた現在の環境文明21では、発足当初から、鎖国政策により否応なしに有限な環境で平和で持続的に生きた江戸時代の人々が培った知恵を探した。それが今、私達が提唱している倫理（心構え）の基盤となっている。このように古きを訪ねる心の姿勢は、私には昔からあったと再確認している。



日程のお知らせ

●環文サロン
日時　2023 年 9 月 8 日（金）16:00 ～ 17:00
※オンラインにて開催

●「未来世代の権利」部会
日時　2023 年 9 月 16 日（土）13:30 ～ 16:00
場所　聖心女子大学　4 号館 4-2 教室 (最寄り駅：広尾)
※オンライン併用、参加ご希望の方は事務局まで

●経営者「環境力」クラブ定例会
日時　2023 年 9 月 21 日（木）

●エコサロン大阪（関西グループ）
次回の会合について、日時、場所、内容は許斐（このみ）さんにご連絡ください。
(tomato331.konomidaisy@gmail.com)

環境文明 21 の主な動き（2023 年 7 月）

7 月　7 日 環文サロン開催
グリーン連合幹事会に藤村代表参加
7 月　8 日「未来世代の権利」に関する意見交換会開催
7 月 11 日 経営社「環境力」クラブ総会・勉強会開催
7 月 14 日 第 26 回環文ミニセミナー開催
7 月 21 日 株式会社カンサイ研修にて藤村代表、
加藤顧問が講師を務める

★環文ミニセミナー（※予定）

第 27 回　8 月 31 日 (木)16:00 ～ 17:00
「気候変動対策を名目とした原子力政策の転換（仮）」
講師　大島 堅一 氏 (龍谷大学政策学部　教授)

★パンフレット同封のお知らせ
環境文明 21 の新しいパンフレットを作成しましたので同封いたします。周りの方にも環文の活動をご紹介いただけますと幸いです。

うらかた日記 抄

■我が家のお隣さんは、93 歳と 89 歳の超ご高齢のご夫婦です。お子さん達がよくいらしてはいますが、基本的には夫婦二人の生活。庭には大きな藤棚と梅の大木があり、季節毎に沢山の花を咲かせます。ご主人は腎臓を一つ取るという大手術から見事復活！退院直後から庭仕事を再開し、今ではすっかり元気に。奥様は東京下町仕込みの料理上手で、よい素材で手間をかけたひと品をお裾分けいただきます。庭の蕗の佃煮、近くの農家さんの里芋の白煮、透き通ったオレンジ色の梅ジャム。中でも洋食屋さん顔負けのミートソースは絶品です。日々の家事だけでなく、ご主人は謡を、奥様はコーラスを続けていて、その丁寧な生活ぶりは、「あんな風に歳を重ねたい」と思わせてくれる私のロールモデルです。ご夫婦とも耳が遠く声が大きいため、庭での会話がよく聞こえてきます。6 月初旬には「お父さん、トンボ！トンボがもう来てるわ。」と奥様がご主人に話しかけていましたが、後日、大人の会話中に「トンボ」という言葉を聞いた我が家の 3 歳児がすかさず「お父さん、トンボ！」と叫んだのにはびっくり。どうかお隣さんの前ではそのリピート力を発揮しないでね。(O)

■一年生になったＲ君の夏休みの宿題のお陰で、事務所でもフウセンカズラの栽培開始。「芽が出た！」「細い茎に葉がついた！」「でもほおずきまで育つかなぁ？」と、童心に帰っての観察。猛暑の中の小さな幸せです。／水泳を再開した矢先、突如歩行困難に。脊柱管狭窄症との診断。猛暑の中牛歩の歩みで整形、鍼灸、整骨院へと日替わり通院。お陰でずいぶん歩けるようになりましたが、ジム通いを中止し歩くだけの 3 年半で筋肉が落ちたのも一因かと。再発防止のためストレッチに励む日々です。／本人はお元気ですが、ご家族の付き添いでこれまた病院通いの所長。「老々介護で熱中症、なんてことにならないように！」と言うものの、なかなか難しい問題です。／日本各地そして世界からも異常気象の報告、大西洋の循環も止まるのではとの研究も出されるなど、ティッピングポイント（取返しのつかなくなる転換点）を超えた様相。その中でも経済界の声だけ聞く政治家や官僚の危機感のなさは深刻かつ罪深い。国民の生命財産を守るという責務を今すぐ思い出して下さい！（コ）

うごき

目次 (31 巻 8 号)

今月のテーマ：暑い夏の日に思うこと
〔風〕
「未来を語る」ということ……杉浦淳吉 1
〔ながれ〕
バックキャスティング再考……大西悟 3
夏めく街の崖線……岡田精一郎 4
入念な準備のその先に… ……山田恵 5
コロナ禍その後……竹内翔 6
暑い夏に思うこと～人生のターニングポイントと環境～……岸波秀美 7
祇園祭とクーラー……遠藤瑞季 8
〔報告〕
経営者「環境力」クラブ 2023 年勉強会……事務局 9
〔環境文明社会づくり、あれこれ〕……加藤三郎 11
〔うごき〕……12

環境と文明
2023 年 8 月号
2023 年 8 月 22 日発行
第 31 巻　第 8 号　通巻 359 号

発行所：〒 145-0071 東京都大田区田園調布 2-24-23
ハイツ DORIKONO 301
認定 NPO 法人　環境文明 21
TEL 03-5483-8455　FAX 03-5483-8755
E-mail：info@kanbun.org
URL http://www.kanbun.org/
年会費：9,600 円 (正会員・賛助個人会員・購読)
郵便振替口座 00220 － 1 － 51770
ゆうちょ銀行 〇二九 (ゼロニキュウ) 店 当座 0051770
取引銀行　三菱 UFJ 銀行 武蔵小杉支店　普 3973465
発行人・編集人：藤村コノヱ　印刷所：株式会社大川印刷